

日曜地質巡検会記事

第48回(昭和44年4月20日)

焼山と眉山の火山地質(5万分の1島原)

西村 暉 希(長崎北高等学校)

地学会の巡検会として島原半島を歩くのは久しぶりであったし、やっと48回目の日曜巡検で島原市に足を踏み入れることになった。

集合場所が島原駅からかなり離れた焼山であったことや、交通の連絡が時間的に良くなかったことなど、必ずしも遠くの会員にとっては便利ではなかったが、フェイトある会員はタクシーやマイカーで元気よく焼山に乗りつけた。夏は“そうめん流し”で、涼を求める多くの人で賑わう所だが、まだシーズン前とあってひっそりしている。

10時半、簡単なルート説明の後、焼山の新しくつくられた逍遙通路を登りながら焼山溶岩を見る。焼山の溶岩は多孔質ではないが、きわめてガラス質で色の黒い石基を持った角閃石安山岩である。特に白い長石の大斑晶が印象的である。また、千々石断層の東の延長がこの地、千本木まで伸びているわけであるが、その崖が東の方に焼山の岩場からよくわかった。溶岩からできた岩山の岩の間には数々の枝振りの良い松が生えて、みごとな岩と松のすがすがしい庭園ができあがっている。

景色をカメラにおさめたり、岩を叩いたり溶岩の流れた江戸時代当時の溶岩見物のエピソードなどを聞いたりして焼山散策を終わった。

焼山から眉山へ向かうについて健脚組は眉山の西側のふもとまで歩き、その他の人は数台のマイカーに途中まで便乗することになった。

この辺千本木一帯には昔植えられたたくさんの「はげの木」があるが、今はその木々も遠慮がちに新芽をふくらませている。所々に見られるふだ

ん忘れられている柿の老木は、今ぞ春とばかり輝いた若葉を茂らし畑の主みたいな顔でいる。眉山の西のふもとに着いた時は正午を少し回っていた。眉山は東の方ははげしい崩壊が今も起きているが、西の方は現在では崩壊はほとんどなく登山道もできている。眉山(七面山)の登り口の木陰で昼食にした。これから登る眉山(七面山)の急斜面にそなえた腹ごしらえである。この山は少し離れてみると45~70°ぐらいの山ぎわをなしていて相当にけわしい。午後1時に登りはじめる。七面山は黒雲母角閃石を主とした安山岩でかなり酸性岩に近く場合によっては石英安山岩と呼ばれるほどである。この山は粘性の高い溶岩の噴出によって急斜面をもつ溶岩円頂丘(ラバドーム)ができただけでなく、そのあとの崩壊でさらに急峻な現在の姿になったようである。SENDŌ他(1967)による、眉山溶岩を貫いている七面山南側溶岩なるものを確認しようと皆んな注意しながら登る。はっきりわからぬまま黒いガラス質の岩石と、流理の発達した岩石に出会うことになった。この岩石が七面山の山体形成のち最後に流出した溶岩の七面山南側溶岩らしい。雑木林の急な細い道を登りつめると、社のある七面山の頂上(818m)になる。山頂に着いたのが2時ごろであった。眼下には、広い田園を左右に従え。前方には有明海後方には眉山をおいた城下町島原がのんびりと拡がっている。この上もなくすばらしい緑のステレオ鳥瞰図を私達は観望することができた。今ロープウェイで登って来たばかりのような、または静

かに飛行機からながめているような錯覚を受ける。さらに海のかなたには雲仙や多良岳と同系統の熊本の金峰山が淡くかすんでみえる。またたく間に30分過ぎ、2時半ごろから下山する。ふもとに下りたのは3時過ぎであったが、いつものごとく三々五々の流れ解散となった。島原市街まで下りて眉山を振り廻えると、西に傾いた太陽が平野からすっきりと立ちあがった眉山の雄姿を影絵に見せていた。

地質概略

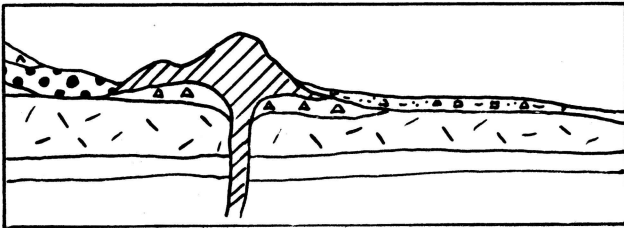
眉山は雲仙火山活動におけるひとつの火山であり、千々石の猿葉山と良く対応して考えられる。眉山はシソ輝石を含む黒雲母角閃石安山岩からなる眉山凝灰角礫岩をおおった、大きなラバドームである。眉山の本体の岩石は眉山（七面山）の頂上で採集できる。鏡下では石英とシソ輝石を含むが岩石名は黒雲母角閃石安山岩である。肉眼的には雲仙火山の他の岩石と同じであって灰色の石基に白い斜長石と黒い雲母と角閃石の大きな斑晶（5～10mm）がばらまかれている。斑状組織の

標本として教材に利用できる。この山の本体の黒雲母角閃石安山岩を貫いて噴出したのが七面山南側溶岩（七面山溶岩）である。この七面山溶岩はあるものは非常に黒く、あるものは流理が発達して、前述の黒雲母角閃石安山岩とは簡単に見分けられる。検鏡によれば普通輝石とシソ輝石を含む角閃石安山岩であり、石基は斜長石、輝石、角閃石、磁鉄鉱より構成されている。

焼山溶岩（新焼溶岩）は、寛正4年（1792年）に流出した溶岩流である。この溶岩流は普賢岳火山の最後の活動の時期にでき、いわゆる雲仙火山の最新の火山活動である。溶岩は普賢岳の北腹のハンド岩（940m）の北の穴より噴出して普賢岳基底溶岩と普賢岳溶岩の間にできているアナセコ谷という谷を流れ下り千本木へと約3kmつづいた溶岩流になった。

岩石的には石基が黒くて、含シソ輝石、黒雲母角閃石安山岩である。顕下では斜長石のアルバイト双晶、カルスバット双晶が普通にみられ、不透明鉱物として磁鉄鉱が多く含まれている。雲仙火山の岩石の中で、この岩石が最もガラス質の岩である。

（参加者 30名）



-  段丘または湖成層
-  1792眉山崩壊物
-  1792年焼山溶岩
-  普賢岳主溶岩
-  普賢岳基底火山
-  七面山南側溶岩
-  眉山主溶岩
-  眉山凝灰角礫岩
-  千本木泥流
-  雲仙基底凝灰角礫岩



GEOLOGY AND PETROGRAPHY OF UNZEN VOLCANO
SENDO, MATSUMOTO, IMAMURA (1967)